



大特集

# 歌麿

江戸浮世絵の黄金時代を築いた名人歌麿  
その絶頂期の逸品を特別撮影のグラフで紹介!

## 《女絵》その奇跡的な完成度

3.....  
4.....  
女絵といえは歌麿——雲母摺の導入、美人大首絵の創始など  
様々な新しい試みから生まれた浮世絵美人画の超一級品をグラフで紹介!  
常に表現の可能性に挑戦していった歌麿の獨創性を探る

## 歌麿女絵の決め手「文」下村良之介

18.....  
浮世絵こそ線による人体表現の最高峰だ!

## ヨーロッパ歌麿成功史「文」稲賀繁美

20.....  
歌麿の何が、ゴングールをはじめ  
ヨーロッパの文化人を興奮させたのか

## 《博物図譜》光る! 歌麿の眼と技

25.....  
驚異的な観察眼とテッサン力が生んだ迫真の描写  
線で描く浮世絵の常識をくつがえす量感、質感溢れる極上の摺り  
女絵の絶頂期と時を同じくして描かれた、狂歌絵本三部作、  
『画本虫撰』『潮干のつと』『百千鳥』を徹底解剖

## 歌麿の生涯

41.....  
流行画家の最前線にありながら、筆禍にあって刑を受けた歌麿……  
残された数少ない資料から謎に包まれた生涯をたどる

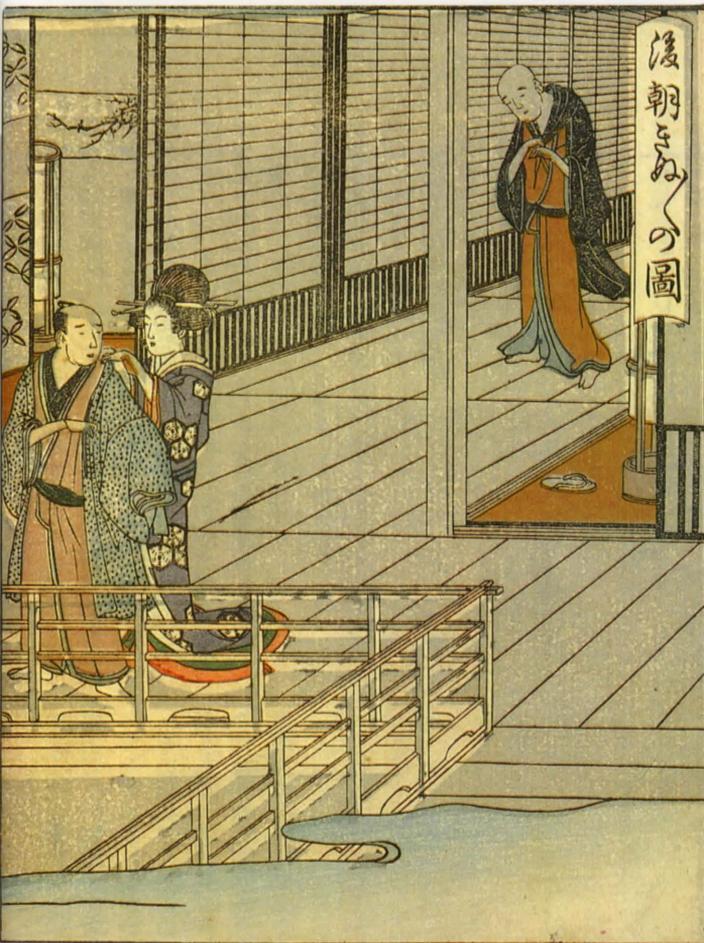
## 《枕絵》絶頂 UTAMARO

49.....  
歌麿がついに到達した枕絵の真髓を名品でつづる  
研究者でよめめたに目にするのができない、  
『真正銘秘本中の秘本』の傑作『歌まくら』を特写で紹介!

## 艶本で読む歌麿「文」林美一

67.....  
艶本からしかわからない歌麿の実像  
歌麿傑作艶本解題





ゴッフル賞といえ、世界で最も有名な文学賞のひとつだが、その由来となった十九世紀フランスの文学者、ゴッフル兄弟と歌麿との因縁にもまた浅からぬものがある。実際、北斎のみならず、彼とならば浮世絵師として、歌麿の名を西欧人の記憶に

# ヨーロッパ 歌麿成功史

UTAMARO サクセス・ストーリー  
〔文〕稲賀繁美「フランス文学・美術史」

刻んだのは、やはりゴッフルに帰せられるべき功績であろう。この間の事情については、古くは永井荷風の紹介を始めとして、後藤末雄、小林太市郎ら先学の研究があり、最近ではポロニーヤ大学のペテルノツリ博士が詳細な研究を公表されている(『ジャポネズリー研究学会報』第六号、一九八六)。それらを参照しつつ、以下簡単に復習してみたい。

## おたまろ登場

段取りとして、まず歌麿という名前が浮上する様子を概観しよう。歌麿の作品とおぼしき品は、既に十九世紀初頭から西欧に存在していたらしい。ヤン・コック・ブロンホフ(二七九一—一八五三)は一八一七年から六年間長崎出島に滞在したオランダ商館長だが、その家族の遺品売り立てカタログ(一九〇七)に「Kita-gawa Outa-naro」の名で「折り紙をする子供」といる若い女性、子供と三味線を鳴らす若い女。後刷り」と見えるからである。

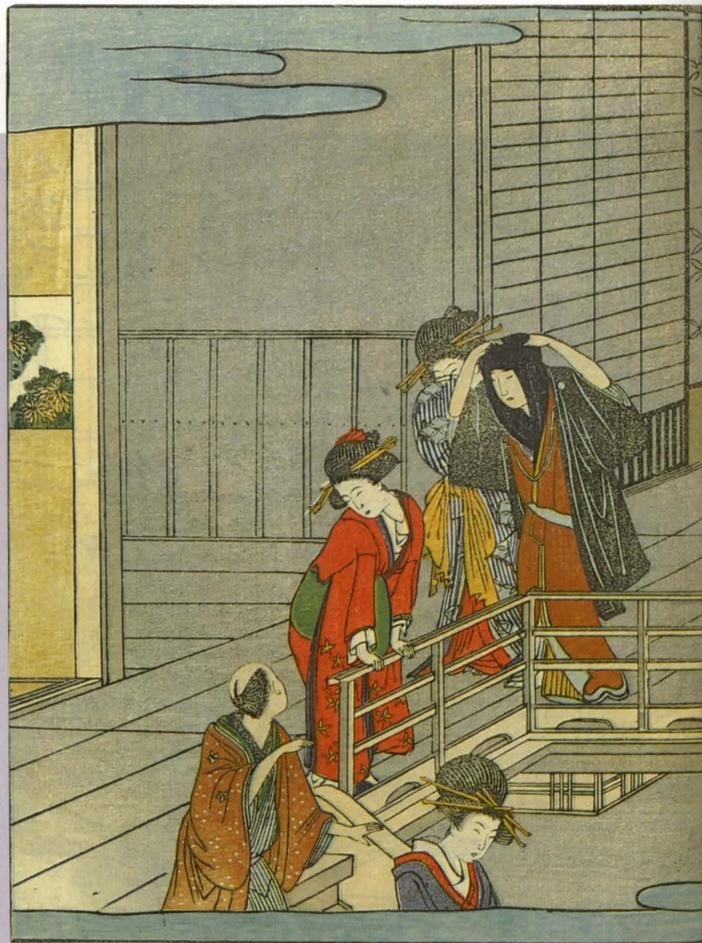
ただし、このコレクションに存在する他の画家が、英山、英泉、北斎、岳亭、豊国、国貞および国芳、といずれも十九世紀前半に存命の画家たちであることから、ペテルノツリ博士は、歌麿というのも二代目のことではないか、と疑っている。いずれにせよ、有名なライデン国立民族学博物館のシーボルト・コレクションにも歌麿の『画本虫撰』が存在するし、早くも一八六一年にこの蒐集をフランスのゴッフル兄弟が訪れていることが、その『日記』(九月十四日)から確認できる。

しかしながら、この段階ではまだ歌麿という特定の芸術家が注目を集めていたわけではない。一八六〇年代からヨーロッパを席巻した、日本美術の流行いわゆるジャポニスムのなかで、もっぱら引き合いに出された名前といえば、やはり北斎であり、歌麿の存在に西欧の愛好家たちが注目し始めるのは、八〇年代を待たねばならない。その口火を切ったのは、すでに一八七二—七三年に日本旅行を果していた、美術批評家テオドル・デュレ(二八三八—一九七)である。

今日なお斯界の権威と目される有力な美術雑誌『ガゼット・デ・ボザール』に、デュレは一八八二年、「北斎、日本の挿絵本と印刷画譜」と題する論文を発表した。そこには、「よすけ・て・はるあきら」と称する、年代からして春信らしいが、春章とも混同したものらしい画家とともに「おたまろ」が初登場し、筆者はその「大判の婦人のすらりとした輪郭と極度の洗練」を称賛する。ただし、題目からも明らかなように、筆者の本題はあくまで北斎にある。いまだ西欧では知られていなかった絵師の名前を並べたてて、自らの新知識をひけらかすついでに、これら先駆者として、北斎に至る浮世絵の歴史に位置付け、歴史的展望を描こうとの野心も明らかだ。デュレいわく、春信が淡色の赤を用いて色摺り木版に先鞭を付けた。つぎに歌麿は、構図ごとに変化に富んだ色彩を多数導入し、「これ以降、多色摺りが完全に開花して」、十九世紀を迎えることになる。西欧がその代表者と見なす画家こそ北斎なのである、とつまり、デュレは、色彩の鮮度と多様さを基準として、いわば浮世絵版画の芸術的展開を編年的に跡づけようとしたわけだ。

デュレの合理主義的・実証主義的解釈に一種の進化論的發展史観を見抜くのは、たやすい。はたしてデュレは同じ論文で、「色彩に関して言えば、芸術が發展するに従い、十九世紀前半の国芳、二世豊国に至って、最も輝かしく、究極の強度が実現された」

歌麿画「吉原青楼年中行事」より「後朝きぬきぬの図」  
 ゴンクールは歌麿を愛し、その錦絵や絵本を通じて、江戸  
 吉原への幻想を膨らませていった。彼は言う——青楼の遊  
 女は我々の国の淫売婦のような下等な淫売婦ではない——



### 歌麿が脚光を浴びた理由

その印象派の影響源であり発  
 想源こそ浮世絵の大胆な原色  
 の使用にあり、との説を唱え  
 ていたのが、ほかならぬデュ  
 レ御本人だったのだ。とすれ  
 ば、印象派を正当化するため  
 に自ら担ぎ出した末期浮世絵  
 の原色を高く評価することが  
 デュレ自身の美学理論の根幹  
 をなす戦略的選択であったの  
 も当然である。だが、このい  
 ささか循環論法じみた原色浮  
 世絵賛美論に大きな変更を迫  
 る事態が、奇しくも印象派が  
 危機を迎える八〇年代に、発  
 生する。それは、林忠正(二八  
 五三〜一九〇六)の登場に象徴  
 される、一連の事態である。

にも林の存在が見え隠れするのだが、実際この本の  
 出版を境目として、パリの日本趣味は、新たな局面  
 を迎える。偶然に浮世絵が発見され、もつぱら「北  
 斎」の名のみ知られる、初期の盲目的愛好の時代が  
 終わり、これ以降、浮世絵史の系統的再発掘と体系  
 的蒐集形成の時代に入るからである。

そうした変化の傍証として、二つの展覧会を比較  
 しよう。ゴンスはこの『日本美術』出版を機会に、  
 一八八三年、パリのジュールジュ・プティ画廊で「日  
 本美術回顧展」を組織したが、おもしろいことに、  
 三千点にのぼる出品があつたにもかかわらず、青銅  
 器とか陶磁器とかの工芸作品が多くを占め、浮世絵  
 の部に歌麿の名はまだ見えない。この時点では、歌  
 麿蒐集はまだその緒にたばかりであつたかと、  
 推測できる。ところが、わずか七年後の九〇年には、  
 パリ美術学校で大規模な『浮世絵版画展』が開催さ  
 れ、千点を越す版画と絵本が時代順、画家ごとに陳  
 列される。歌麿は、版画八十四点、絵本十六点を数  
 え、すでに北斎に次ぐ位置を占めている。

と主張する。中間色もなく直に併置された原色の戯  
 れが、けばけばしさや不調和に陥ることなく諧調を  
 奏でるさまに、デュレは浮世絵最後の達成を見る。  
 色彩派偏愛の解釈というべきだが、これはゴンク  
 ル兄弟が一八六六年に執筆した、画家を主人公とす  
 る小説『マネット・サロモン』に見える浮世絵観と  
 も一致する。実際デュレはゴンクールとも親しく蒐  
 集を競った、日本狂いのひとり、所詮は同じ穴の貉  
 なのであった。

こうした末期浮世絵好みは、今日でも西欧の半可  
 通に根強いが、デュレにとつては、イデオロギー上  
 きわめて重要な意味をもっていた。というのも、デ  
 ユレはモネやピサロなど印象派の画家たちの友人で  
 あつたからだ。その兄貴分にあたる、晩年のマネを  
 も巻き込んで、印象派の画家たちは、当時、世間の  
 嘲笑にもめげず、原色を併置し、アカデミックな陰  
 影・肉付けを追究する試みに没頭していた。もちろ  
 んデュレは彼らの実験を擁護する立場にあつたが、

一八七八年のパリ万国博覧会に通訳として派遣さ  
 れ、その後美術商若井兼三郎の起立工商会社のパリ  
 支店員となり、のち独立して一九〇五年まで、文字  
 通りパリそしてヨーロッパの日本芸術狂たちの知恵  
 袋となつたこの傑物画商の生涯については、木々康  
 子氏の『林忠正とその時代』に詳しい。その林は先  
 に言及した『ガゼット・デ・ボザール』誌の編集長、  
 ルイ・ゴンス(二八四六〜一九二二)を助けて、まず大  
 著『日本美術』(二八八三出版の縁の下の力持ちとな  
 った。たしかに、この画期的な豪華本ではまだ十九  
 世紀浮世絵最盛期説に力点が置かれていて、歌麿は  
 浮世絵の極致にも四傑にも選ばれてはいない。しか  
 し、その女性の姿に、息も絶え絶え、といった様子  
 のなまめかしさが指摘され、また歌麿の花鳥画家と  
 しての才能にも言及されている。こうした評価の裏



飽とり[大判錦絵三枚続の右] 東京国立博物館  
「解剖学の完全な知識をもって描かれた女性裸体だが、単純化され、その量塊の内に要約され……」「その線描にはなにかしら能書家の手になるふうが見える」とゴンクールが評したこの三枚続も、彼の愛蔵品に含まれていた

青楼十二時 巳ノ刻 大判錦絵 東京国立博物館  
寛政前半、脂がのり切った時期の歌麿が、吉原遊女の一日を時間を追って十二枚に描いたシリーズ。巳ノ刻は午前9~11時ころ。朝風呂からあがった遊女の姿である



に綴っている。

さて、同時代の英国の状況を一瞥しても、やはり歌麿の登場に時期を同じうする変動が認められる。一八八五年発行のジョージ・オズリーの豪華本『日本の装飾美術』は、工芸中心の研究で、まだ歌麿への言及はない。一方、日本滞在の経験があり、既にはやくも一八七九年に『日本アジア協会紀要』に「日本芸術の歴史」を公表して、第一人者の誇りも高かった外科医ウィリアム・アンダーソンが、八六年、

大判の写真複製を満載した『日本の絵画芸術』を出版する。ゴンスへの対抗意識もあからさまに剣き出しにしたこの本で、初めて歌麿に触れたアンダーソンは、『百千鳥』の空押しに賛嘆するとともに、歌麿によって「彩色の美は完璧さの限界に達し、人物の姿勢も自然で打ち解け、衣の線は優美さに溢れている」と解説する。八八年には自分が大英博物館に寄贈した膨大な日本と中国の絵画作品への学術的カタログを出版するが、そこには歌麿の略伝が付されていた。こうした歌麿評価は、ハンブルクのユステイス・プリンクマンが八九年に出版する『日本の芸術と工芸』をはじめとして、それ以降の実証的諸研究に受け継がれてゆき、やがて一九〇七年にはクルトの該博な『歌麿』研究に結実することとなる。こうして浮世絵史の再構築が進展し、学問として精緻となるに従って、好事家の目標も移って行く。同時代の日本でおお生産されていた、いわゆる末期浮世絵に飽き、代って、それまで欧米の市場には出回らなかつた時代ものの珍品浮世絵が、垂涎的となる。画商の側には、掘り出し物の分かる顧客を作ることと同時に値段を吊り上げる口実を設け、完璧

な蒐集を夢見る愛好家の欲につけ入って、新たな需要を創出しようとする算段もあったはずだ。その点でも、プリンクマンと同じハンブルク出身の骨董商S・ビングが、一八八八年から三年間に渡って仏・英・独語同時出版した月刊誌『芸術の日本』は意味深長である。歌麿が都合十四点、写真応用金属製版ジロッタージュを駆使した着色図版で紹介されているのだが、選ばれた版画というのがまるで玉石混交なのである。林忠正は名作厳選・顧客内覧の販売法に徹したが、それへの対抗手段として、ビング側は組織力と販売量を売り物にしたものらしい。ゴンクール他の幾つもの証言も、この推測を裏付ける。

### 作家ゴンクールと歌麿

こうした背景を踏まえて、そろそろエドモンド・ゴンクールの『日記』に目を転じ、その歌麿傾倒ぶりを、林忠正との関連で跡づけよう。弟ジュールの死後(二八七〇)、兄エドモンドの日記に林の名前が初登場するのは一八八三年一月二十五日。エドモンドが既に八五年には『高名美人見立忠臣蔵』を収めた画譜を林から百七十五フランで購入したことが、一九七六年のパリ、ユゲット・ベレス画廊の画期的な歌麿展への出品から確認されており、ペテルノッリ博士は確認の取れる最初の歌麿購入期日として挙げておられる。『日記』一八八八年五月二十五日になると、かつての自著『十八世紀フランスの芸術』と双璧を成すような極東美術に関する著作群の構想が語られ、研究すべき対象として、北斎、歌麿、光琳、笠翁、岳亭の名が列挙されている。そもそもフランス十八世紀風俗を綿密に考証し、偏執的な関心を寄せてその細部の叙述に腐心してきたゴンクールである。雅なる宴(フェット・ギヤラント)の画家ワトローの描く男女の機微に惹かれたエドモンドが、同じ十八世紀に吉原の女たちと親しく交わった歌麿に、相い似通う感性を発見し、その同時代的類似に親しみを抱いたと

しても、不思議でない。

こうしてゴンクール「鍾愛の画家」となり、「日本のワトー」と称された風俗画家歌麿は、文豪の東洋芸術家列伝の第一冊目選ばれた。その傾倒ぶりを伝える逸話をひとつだけ引いておこう。いわゆる歌麿伝説にまつわる一節である。「私のお気に入りの芸術家、歌麿が描くすうりと背の高い女たち、『書楼十二時』のなかの一枚、蜘蛛の空色の巣を織つたような薄青い着物がずれて小さな肩を露わにし、胸がときめくようにやせた女の逸楽をそそのかの優雅さに、私はうつとりと放心してしまうのだ。この芸術家は女性の肉体の恋人だと思われ、と私がかれ(林)に言うと、歌麿は消耗死したのだと、かれは私に漏らすのである。」(八八年五月十三日、近藤映子訳)。

『日記』に見えるこの会話は、ほとんどそのまま「歌麿」二七節にとられているのだが、そうしたゴンクールの色好みを裏書するように、『日記』には、デュレの家で師宣の春画を見たときの感激が繊細な筆致も悩ましく描写されたり(八五年十一月十九日)、版画家ブラックモン、彫刻家ロダンに自分の所蔵する「エロチック」を見せて一緒に鑑賞し、昼食のさかなに

した際の生々しい記録(八七年一月五日)などが散見する。『歌麿』本文と比べて見ると、これらの断章が再度利用されて、「春画」を扱った、つづく二八節に組み込まれているのが如実に分かる。ちなみに、戦前の日本では、検閲を考慮してであろうか、荷風は紙面の都合とやらで、この箇所をはしり、ゴンクールが林の助けで歌麿の自画像を見付けたした条りに触れるのみだし、野口米次郎訳『歌麿』は、この節の直前で本文が打ち切れ、問題の箇所はやはり訳出されていない。

一八八〇年代は、いわば浮世絵蒐集の英雄時代であったが、九一年の『歌麿』の公刊をひとつの潮時として、フランスの日本趣味は第三の転機を迎えるといつてよからう。両端にあたる時期に書かれた象徴的な記事を二つ比べると、その間の事情がはっきりする。まず八二年十二月二十九日の『日記』には「狂気の沙汰、日本物への止みがたい渴望。今年はそのために三千フラン浪費した。稼いだ金すべてだ」と見える。十年後の九二年七月一日に「日本趣味人夕食会」でのビングの談として、アメリカ人の印象狂(つまり浮世絵狂)を伝えてゴンクールは嘆く。ヤンキ

の億万長者は一箱分の浮世絵を三万フランで買ってしまい、その応接間にはゲインズボロと並んで歌麿が飾つてあるそう。やつらの趣味になってしまえば、もう欧州では何も手に入るまい、と。『歌麿』をその前の年に書き上げた作家その人の言葉だけに、この間の浮世絵高騰を物語つて余りある。

実際、『歌麿』の脚注によれば、一八八五年ごろに四十フランで入手した「鮑とり」が、九〇年のフィリップ・ビュルティエの売り立てでは千五十フランで売れ、九一年十月二十日のゴンクール宛書簡で、林も、歌麿の値段が日本でも三倍に高騰したことを苦り切つて報告している。九六年、老作家が余力の総てを注いだ『北斎』公刊の後、ほどなくして亡くなる、その愛蔵のコレクションは遺志によって競売に付され、浮世絵狂騰に「一層の」拍車をかけることとなる。こうして早くも初期コレクション散逸の時代が始まる。ゴンクール自身から贈られた「歌麿」への礼状に古参の同僚デュレも「悲嘆」を込めて書く通り、「伝記の出版はあらたな愛好家の一群を形成して……我々が古き良き蒐集家の時代は終わりを告げる」こととなったのである。

る。折々の不思議。



HIROMORI KUWAHARA

### 桑原巨守彫刻展

5月14日(月)→6月2日(土)

10:30A.M.~7:00P.M./日旺・祭日休廊

ギャラリー・ユニバース

東京都中央区銀座5-13-3 (歌舞伎座正面)  
電話(542)1311代表

GALLERY UNIVERSE

海老原の不思議